

心的外傷後成長 (PTG) と心的外傷後低下 (PTD) の共存に関する一考察

発達障害児・者の親の人生の変化

小坂 智子

A Study of Coexistence between PTG and PTD
The change of life for the parents of children with developmental disabilities
Satoko KOSAKA

Key words: posttraumatic growth (PTG), posttraumatic depreciation (PTD),
parents of children with developmental disabilities, tipping point

キーワード：心的外傷後成長 (PTG), 心的外傷後低下 (PTD), 発達障害児・者の親, 転換点

はじめに

それまでの人生を揺るがすような、強いストレス症状を引き起こす、辛く悲しい出来事に遭遇することにより、悩みもがいた後に人間として成長する現象を「心的外傷後成長 (Posttraumatic Growth: 以下 PTG とする)」という (Tedeschi & Calhoun, 1996)。2000 年以降、この困難を通じた上でのポジティブな変化である PTG に関する研究は世界中で多く行われてきた (概説として Calhoun & Tedeschi, 2006)。

一方、PTG とは対照的に、人生を揺るがすような危機の後にネガティブな感情の変化が生じる心的外傷後低下 (Posttraumatic Depreciation: 以下 PTD とする) という概念も提唱されている (Baker, Kelly, Calhoun, Cann & Tedeschi, 2008)。これまでの PTD に関する研究では、PTG と PTD を同時に経験している人が一定数いることが示唆されている (eg, Aldwin, Levenson & Averon, 1994, Frazier, Conlon & Glaser, 2001, Cann, Calhoun & Tedeschi, 2010)。この二つの

概念は言葉上、正反対のものであるが、多くの先行研究においてこれらは相関関係になく、互いに独立していることが示されている (例えば, Taku et al, 2021)。さらに、2018 年に改訂された PTG 理論モデル第 5 版では、結果としての PTG と並んで、新たに「ストレス」も相互に関係しあうものとして配置されている。これはつまり、PTG の実感があってもストレスとなるネガティブな感情は残っている現実があるということである (Tedeschi, Shakespeare-Finch, Taku & Calhoun, 2018)。

PTG 研究の対象となる、これまで生きてきた人生感を揺るがすようなトラウマティックで非常に危機的な出来事には、大切な人との死別、地震などの自然災害被災、ガンや HIV などの疾患罹患などが多いが、障害に関するものや、発達障害児の親を対象にしたものもいくつかある。例えば、発達障害児の親の PTG 尺度の得点は、他の例えばガンや交通事故のサバイバーの PTG 得点よりも高いとの報告や (Young, Finch & Obst, 2020)、我が国における発達障害

児の親の成長とPTGの関連に関する研究などである(永原・佐田久, 2021)。永原ら(2021)の研究によると、PTGに至った発達障害児の親の中には、その子育ての経験を通して、自身の人生においてポジティブな意味づけを感じられていない者もいたとされている。つまり、発達障害児・者を授かり育てていく過程においてPTGとネガティブな変化(PTD)が共存している状態があることが考えられる。よって本稿では、まず、PTGとPTDの共存に関する先行研究を概観し、発達障害児・者の親のPTGとPTDの共存のあり方について考察する。さらに、その共存を超えるポイントが存在するのかを考察する。

PTGとPTDの共存

PTGは「危機的な出来事や困難な経験の後の精神的なものがきや奮闘の結果生じるポジティブな心理的変容」と定義されている。このPTGを量的に測定する尺度、Posttraumatic Growth Inventory(以下PTGIとする)を用いた研究は世界中で行われ、各国ごとのバージョンも作成されている(eg, Taku, Calhoun, Tedeschi, Gil-Rivas, Kilmer & Cann, 2007)。PTGIは「他者との関係」「新たな可能性」「人間としての強さ」「精神的な変容」「人生に対する感謝」の5因子からなる。このPTGIは、ポジティブな変化のみを測定しているが、実はPTGと同時にネガティブな変化も経験しているとの報告がいくつかなされている。例えば、アメリカの退役軍人を対象とした戦闘経験とそのストレスの長期的影響に関する研究では、ネガティブな結果(不幸・不快感がある、人生を狂わされたなど)を報告しつつも、ポジティブな結果(自己肯定感の高まり、人生の方向性と目的が明確になるなど)ももたらされていたというものや(Aldwin, et al, 1994)、また、性的暴行被害者に関する調査では、ポジティブな変化とネガティブな考えが共存していることが報告されているものがある

(Frazier, et al, 2001)。つまり、人生を揺るがすような危機を体験することによる変化には、ポジティブなものやネガティブなものが共存している可能性があるということである。(Dohrenwend, Neria, Turner, Turse, Marshall, Lewis-Fernandes & Koenen, 2004)。

心的外傷後低下(PTD)

先に挙げた多くの研究結果をふまえ、PTGとネガティブな変化を同時に測定するため、PTGI 21項目をそのまま意味が正反対になるように作成された尺度(42項目)が、心的外傷後低下尺度(以下PTDIとする)である(Baker, et al, 2008)。Bakerらによる、この尺度を使った研究では、およそ27%の人がPTGとPTDの両方を経験しているとされている。また、PTGとPTDの間には相関はみられなかったことから、両者は互いに独立したものであることが示唆されている。また、2021年には、PTGIの21項目に「精神的・実存的変容」4項目を追加した合計25項目からなる拡張版心的外傷後成長尺度が作成された(以下PTGI-Xとする)(Tedeschi, Cann, Taku, Senol-Durak & Calhoun, 2017)。さらに、その項目の意味をそのまま正反対としたPTDI 25項目を付け加えた、合計50項目からなる心的外傷後成長・低下尺度(以下PTGDI-X-50)も作成され、PTGDI-X-50を使用した10か国比較研究もなされている(Taku, et al, 2021)。この研究ではアメリカ合衆国のみ正の相関がみられ、それ以外の9か国で、PTGとPTDは相関無しという結果となった。また、イタリア、ネパール、アメリカ、ドイツ、ポーランドの6か国では、ある程度までは、PTGとPTDは正の相関であるが、ある一定の地点で負の相関となるという、PTGとPTDの共存における転換点の存在があるかのような興味深い結果となっている。

発達障害児・者の親の PTG と ネガティブな変化の共存

発達障害児・者の PTG 研究は、国内外においていくつかなされてきている (eg, Laufer & Isman, 2022, 山根, 2014)。そのほとんどがポジティブな変化のみに焦点を当てたものとなっているものの、ポジティブな変化のみを問う回答方法が社会的望ましい回答をする傾向になるのではないかという指摘や (山根, 2014)、質的研究ではポジティブな変化と同時にわずかではあるがネガティブな変化も報告されている (永原ら, 2021)。

発達障害児の親が受ける代表的なネガティブな経験として、スティグマが挙げられる (Werner & Shulman, 2013)。スティグマとは、アメリカの社会学者ゴフマンにより「人の信頼をひどく失わせるような属性」「ある個人を、全体や普通な個人からの汚名や軽蔑の対象に陥れるもの」と定義され、属性の対象は、疾病・障害・職業・人種・宗教など多岐にわたる (Goffman, 1963)。発達障害者の家族の主観的幸福感は、スティグマにより低減するという研究や、スティグマと PTG は負の相関をもつ (Kamen, Vorasarun, Canning, Kienitz, Weiss, Flores, Etter, Lee & Gore-Felton, 2016) という研究が報告されている。

このスティグマと PTG を、発達障害児・者の親に同時に測定した研究によると、PTG とスティグマには相関は見られなかったが、調査協力者 166 名を PTGI とスティグマ尺度によって分類したところ、1) PTG が高く、スティグマが低い群、2) PTG, スティグマ共に高い群、3) PTG が低く、スティグマが高い群の 3 群に分類される結果となった (小坂, 未発表) (Table 1)。この第 2 群は、発達障害児・者の親の親になるという人生観を揺るがすようなトラウマティックな出来事により、ポジティブな変化である PTG と、スティグマを経験するというネガティブな変化である PTD を同時に経験している状態

Table 1 発達障害児・者の親の分類結果

	PTG	Stigma	人数
Group 1	high	low	68
Group 2	high	high	58
Group 3	low	low	40

であるといえる。先行研究の 27% を超える、調査協力者のおおよそ 35% に PTG と PTD が共存しているという結果となっている。

PTG とネガティブな 変化の共存とその転換点

PTGDI を使用した先行研究では、PTGI 得点 (105 点満点) が、0-75 点までは PTG と PTD は正の相関を成し、75 点を越えたところで負の相関になるという直線的ではない変化の様相を示した結果となっている (Michelsen, Therup-Svedenlof, Backheden & Schulman, 2017)。また、Taku et al (2021) においても同様の結果が得られている。これは、人生を揺るがすようなトラウマティックな出来事からものがきを経験し成長するには、ある一定期間はそれに相応するネガティブな変化・コストも伴うものと推測される。

しかし、あるポイントを越えたところで、PTG と PTD の分岐点が存在していると考えられる。この分岐点こそ、何かが変わったと判断する境目である「転換点 (Tipping Point)」でないかと宅は述べている (宅, 2021)。つまり、ある程度までは PTG も PTD も両方経験するが、この転換点辺り以降、PTG の自覚がある一定以上強くなると PTD は抑制されるというのである。一体、人はトラウマティックな出来事からどのぐらいの時間が経過して、どんなことがきっかけとなって変化し、またその変化を自覚しこの転換点にたどり着くのか、それともたどり着かないままの人もいるのか。

自分が変わる転換点に作用する要因（変数）とは

2018年に発表されている第5版PTGの理論モデルを援用し、PTGとPTDの共存、及び転換点について考えてみたいと思う（Tedeschi et al, 2018）。（Figure 1）1）人生を揺さぶるようなトラウマティックな出来事が起き、2）情緒的苦痛が引き起こされる、3）コントロールの難しい侵入的反芻から、4）自己分析・自己開示を経て、5）意図的反芻が行われ、壊れてしまったものに新しい意味付けがなされ再構築される。そこには6）ソーシャルサポートやロールモデルなどの社会文化的影響を受けている。最終的に7）結果としてのPTGにたどり着く。この第5版PTGの理論モデルでは、7）の前に「変わった後の世界・現実の受容」が加えられている。「変わった後の世界・現実の受容」とは正に個人レベルのパラダイム・シフトであり、ここにこそ、自分はどう変わったかと自覚する転換点があるのではないかと考える。

この転換点でより安定した自己を形成し認識

するかによって、結果としてのPTGも自覚されやすくなるように考える。では、どのように安定性をもたらす変化は生じ、それに気づくことができるのか。PTGの実感をもたらすきっかけを調査した研究では、66-68%の人が他者との関係性について挙げていることから（Fraus, Dominick, Walenski & Taku, 2021）、PTGIの因子の一つである「他者との関係」が「転換点」に関連しているのではないかとという仮説を以下のように立てたい。自身を客観的に把握するには他者からの意見や評価は必要不可欠である。発達障害児の親となり、その育児に苦勞してきたことを労ってもらったり、頑張りを評価してもらえることは自信につながるであろう。PTG理論モデルにおいても、5）意図的反芻には社会文化的影響が関連しているとされている。この社会文化的影響の具体的なものには、ソーシャルサポートやロールモデルなどの人との関わりが挙げられており、他者との適切な関わりや、肯定的に評価されることは自信や自尊心につながっていく。他者から肯定的に評価してもらえ

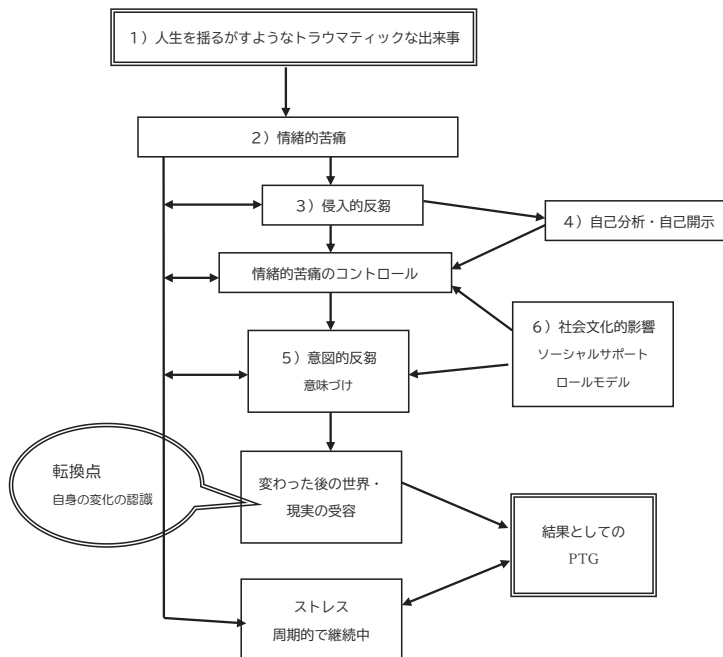


Figure 1 PTG理論モデル第5版（Tedeschi, et al, 2018）を基に作成

ことは自信の成長を実感させるに違いない。

成長を実感するきっかけは、他者との関わりにおける特定の出来事かも知れないし、長期間にわたる一連の出来事かも知れない。成長を実感するためにはより多くの他者からの説得力のある肯定的なフィードバックが必要と考える。では、どうしたら他者からの評価・フィードバックを素直に受け止め、自信つなげていくことができるのか、ここには自尊感情と類似する概念である自己愛が関連しているのではないかと考えられる。

自己愛傾向と PTG と ネガティブな変化の共存の関連

自己愛と自尊感情は類似する概念であり、自分自身に対する肯定的感情のことである。また、自己愛傾向とは「自分自身への関心の集中と、自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、その感覚を維持したいという欲求によって特徴づけられる性格特性」のことである（小塩, 1998）。小塩（1999）によって作成された自己愛人格目録短縮版は、「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」の3因子から成る。このうちの「注目・賞賛欲求」の高い人は、常に他者からの賞賛によって自己を定義づけようとするため、自身の評価に一貫性がなく不安定であり、それにより日常の自尊感情もかなり変動

するという。さらに、自己愛傾向が全体的に高いもののうち、「注目・賞賛欲求」が優位な人は、対人恐怖的で、他者や社会との関係性を意識し過ぎて対人行動面や情緒面において不適応を起し、且つ理想とする自己と現実自己との不一致が大きいとの研究結果もある（小塩, 2002, 小塩ら, 2005）。

これらの先行研究結果から、PTGとPTDが共存している状態にある人は、この「注目・承認欲求」が高い傾向にあるのではないかと推測する。自身が理想としてきた自己と現実の自己とのギャップの大きさを受け入れることが出来ず、それゆえに、他の人に頼ることがなかなか出来なかつたり、他の人からの自身に対する肯定的なフィードバックを素直に受け取ることが出来ずに、PTGとPTDが共存している不安定な状態なのではないかと考えられる。この状態から一歩抜き出で、転換点を越えた地点でPTGが優位になればPTDは抑制され、小坂（未発表）の研究結果でいうところの第1群（PTGが高くスティグマが低い）になり、自己愛傾向が強すぎた場合はPTGには至らずPTDが優位になるのではないかと推察する。この転換点、変化のポイントには、他者との関わりから自分に自信を持ち、他者からの評価に敏感過ぎないようになることが大切なのではないかと考える。（Figure 2）

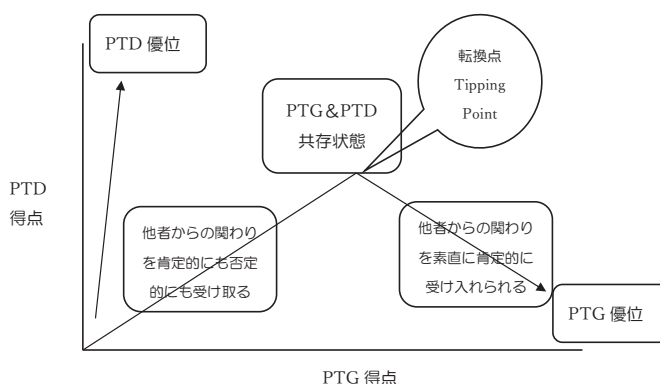


Figure2 PTG と PTD の関連と転換点のイメージモデル図
Michelsen, Therup-Svenllof, Backheden & Schulman (2017, Figure 1 を基に作成)

人のこころの変化は一般化できるような直線的なものでなく、変化の様相もきっかけも人それぞれで曲線的なものである。このいわゆる変化の「転換点」を明らかにすることは難しいかもしれないが、引き続き、量的および質的研究両側面から、変化の様相に迫ることにより、一人でも多くの発達障害児・者の親の豊かな人生に繋がることを期待したい。

謝辞

本稿執筆にあたりましてご指導いただきました申崎真志先生（関西大学文学部教授）に心より御礼申し上げます。

引用文献

- Aldwin, C. M., Levenson, M. R. & Avron Spiro III. (1994). Vulnerability and resilience to combat exposure: Can stress have life long effects? *Psychology and Aging*, 9 (1), 34-44.
- Baker, J. M., Kelly, C., Calhoun, L. G., Cann, A. & Tedeschi, R. G. (2008). An examination of posttraumatic growth and posttraumatic depreciation: two exploratory studies. *Journal of Loss and Trauma*, 13, 450-465.
- Cann, A., Calhoun, G. L., Tedeschi, R. G. (2010). Posttraumatic growth and depreciation as independent experiences and predictors of well-being. *Journal of Loss and Trauma*, 15, 151-166.
- カルホーン, L. G.・テディチ, R. G. 宅香菜子・清水研 (監訳) (2014). 心的外傷後成長ハンドブック：耐え難い体験が人の心にもたらすもの pp209-256. 医学書院. (Calhoun, L. G. & Tedeschi, R. G., (2006). *Handbook of Posttraumatic Growth: Research & Practice*. Lawrence Erlbaum Associates.)
- Dohrenwend, B. P., Neria, Y., Turner, J. B., Turse, N., Marshall, R., Lewis-Fernandes, R., & Koenen, K. C. (2004). Positive tertiary appraisals and posttraumatic stress disorder in U. S. male veterans denial. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 72, 417-433.
- Fraus, K., Dominick, W., Walenski, A. & Taku, K. (2021). The impact of multiple stressful life events on posttraumatic growth in adolescence. *Unpublished manuscript submitted for publication*.
- Frazier, P., Conlon, A. & Glaser, T. (2001). Positive and negative life changes following sexual assault. *Journal of Consulting and Clinical psychology*, 69(6), 1048-1055.
- ゴフマン, E. (1970). 石黒毅 (訳) スティグマの社会学：烙印を押されたアイデンティティ せりか書房.
- (Goffman, E. (1963). *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*. Prentice-Hall, Inc.)
- Kamen, C., Vorasarun, C., Canning, T., Kienitz, E., Weiss, C., Flores, S., Etter, D., Lee, S., & Gore-Felton, C. (2016). The Impact of Stigma and Social Support on Development of Post-traumatic Growth Among Persons Living with HIV. *Journal of Clinical Psychology in Medical Settings*, 23, 126-134.
- 小坂智子 (未発表). 発達障害児・者の親の心的外傷後成長とスティグマの関連：クラスター分析による分類.
- Laufer, A. & Isman, E. (2022). Posttraumatic growth (PTG) among parents of children with special needs. *Journal of Loss and Trauma*, 27(1), 18-34.
- Michelsen, H., Therup-Svedenlof, C., Backheden, M. & Schulman, A. (2017). Posttraumatic growth and depreciation six years after the 2004 tsunami. *European Journal of Psychotraumatology*, 8, 1302691.
- 永原康裕・佐田久真貴 (2021). 発達障害のある子どもを育てる母親の経験における成長感とその関連要因：PTGの観点から. *発達心理臨床研究*, 27, 1-11.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連. *教育心理学研究*, 46, 155-163.
- 小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方の関連. *性格心理学研究*, 46, 280-290.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み：対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴. *教育心理学研究*, 50, 261-270.
- 小塩真司・小平英志 (2005). 自己愛傾向と理想自己の記述に注目して. *人文学部研究論集 (中部大学)*, 13, 37-54.
- Taku, K., Calhoun, L. G., Tedeschi, R. G., Gil-Rivas, V., Kilmer, R. P., & Cann, A. (2007). Examining posttraumatic growth among Japanese university students. *Anxiety, Stress, and Coping*, 20(4), 353-367.
- Taku, K., Tedeschi, R. G., Shakespeare-Finch, J., Krosch, David, G., Kehl, D., Grunwald, S., Romeo, A., Tella, M. D., Kamibepu, K., Soejima, T., Hiraki, K., Volgin, R., Dhakal, S., Zieba, M., Ramos, C., Nunes, R., Leal, I., Gouveia, P., Silva, C. C., Chaves, P. N. D. P., Zavala, C.,

- Paz, A., Senol-Durak, E., Oshiro, A., Canevello, A., Cann, A. & Calhorn, L. G. (2021). Posttraumatic growth (PTG) and posttraumatic depreciation (PTD) across ten countries: Global validation of the PTG-PTD theoretical model. *Personality and Individual Differences*, 169, 110222.
- 宅香菜子 (2021). コロナ禍と心の成長：日米における PTG 研究と大学教育の魅力. 第 3 章. 風間書房.
- Tedeschi, R. G., & Calhorn, L. G. (1996). The posttraumatic growth inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress*, 9, 455-471.
- Tedeschi, R. G., Cann, A., Taku, K., Senol-Durak, E. & Calhorn, L. G. (2017). The Posttraumatic Growth Inventory: A revision interesting existential and spiritual change. *Journal of Traumatic Stress*, 30, 11-18.
- Tedeschi, R. G., Shakespeare-Finch, J., Taku, K. & Calhorn, L. G. (2018). Posttraumatic growth: Theory, research, and applications. NY and London: Routledge.
- Werner, S. & Shulman, C. (2013). Subjective well-being among family caregivers of individuals with developmental disabilities: the role of affiliate stigma and psychosocial moderating variables. *Research in Developmental Disabilities*, 34(11), 4103-4114.
- 山根隆宏 (2014). Benefit findingが発達障害児・者の母親の心理的ストレス反応に与える効果. *心理学研究*, 85(4), 335-344.
- Young, S., Shakespeare-Finch, J. & Obst, P. (2020). Raising a child with a disability: one-year qualitative investigation of parent distress and personal growth. *Disability & Society*, 35(4), 629-653.

